大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第11集

－主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

山脇横穴墓

２００６年３月

大分県教育庁埋蔵文化財センター

－主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

山 脇 横 穴 墓

２００６年３月

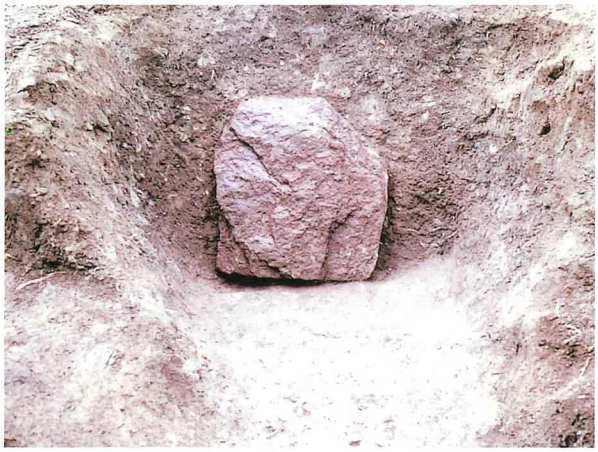
大分県教育庁埋蔵文化財センター

巻頭図版　　山脇横穴墓

PL－1

調査前の状況

前庭部土層



閉塞状況

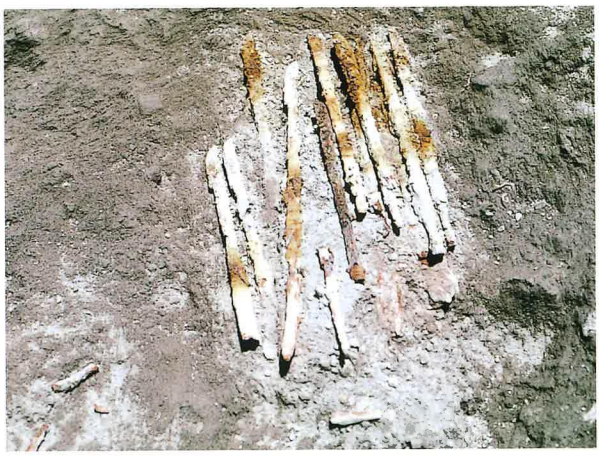
前庭部完掘状況

１号人骨出土状況（奥壁に向かって左）

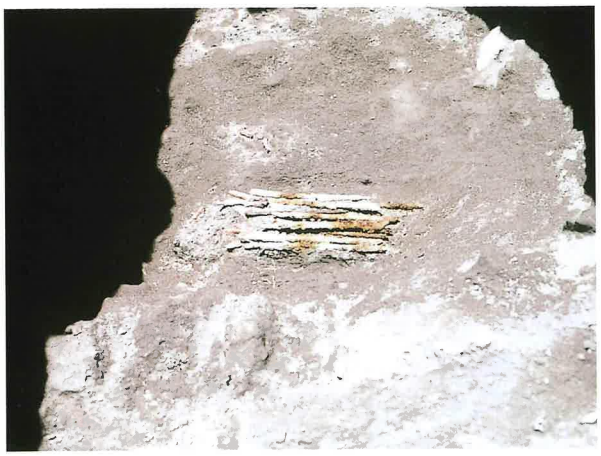
２号人骨出土状況（奥壁に向かって右）

遺物出土状況（鏡・刀子）

遺物出土状況（鉄刀）



遺物出土状況（鉄鏃）



遺物出土状況（鉄鏃）

屍床（奥壁に向かって右側）

玄室内ノミ痕

古道検出状況

遺跡見学１

遺跡見学２

遺跡見学３

山脇横穴墓

鹿角装鉄刀

鉄刀茎部

素文鏡

刀子・鉄鏃

山脇横穴墓出土遺物

序　　文

本書は、大分県教育委員会が主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴い、大分県竹田土木事務所の依頼を受けて実施した竹田市直入町に所在する山脇横穴墓の発掘調査報告書です。

竹田市直入町は大分県のほぼ中央に位置しており、町内には縄文時代の遺跡である横枕遺跡や古墳時代の三反田遺跡、長湯横穴墓群をはじめ、旧石時代から中世にかけての数多くの遺跡が所在し、古代においては「豊後国風土記」に球覃(くたみ)郷、「日本書紀」には来田見(くたみ)邑、「万葉集」には朽網(くたみ)と記された古い歴史を持つ地域です。

今回調査した山脇横穴墓は、直入町の中心部を流れる大分川支流の芹川左岸の丘陵上にあり、ここでは人骨や数多くの副葬品が発見され、古墳時代後期の埋葬形態を明らかにする上で貴重な成果を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護並びに地域の先人の生活を理解する資料として、さらには、学術研究の一助として活用されれば幸いです。終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成18年３月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長　**渋　谷　忠　章**

例　　言

1、本書は平成16年に実施した主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う山脇横穴墓の報告書である。
2、調査は、大分県教育委員会が大分県竹田土木事務所の委託を受け実施した。
3、遺跡・遺構の実測と撮影は調査担当者の甲斐寿義・吉田和彦・玉川剛司（別府大学大学院）が行った。遺物の実測及びトレースは大分県教育庁埋蔵文化財センターで行い、遺物写真撮影は槙島隆二が行った。
4、本書で用いた方位はすべて磁北である。
5、本遺跡の出土遺物並びに図面・写真等は,大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
6、本書の執筆・編集は、甲斐寿義が行った。

目　　次

第1章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査団の構成 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 2～3
第３章　山脇横穴墓の調査 …… 3～14
　第１節　報告にあたって …… 3
　第２節　発掘調査の記録 …… 4～11
　　１．調査経過と概要 …… 6
　　２．遺構と遺物 …… 6～11
　　(1)　立地・調査前の状況 …… 5
　　(2)　前庭部 …… 6～8
　　(3)　羨道・玄室 …… 8
　　(4)　出土した遺物 …… 9～11
　　(5)　道状遺構 …… 11
　第３節　考察 …… 12～14
附　篇
山脇横穴墓出土人骨について …… 17～25

図　版　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　山脇横穴墓と周辺の遺跡 …… 3
第３図　各部位の名称 …… 4
第４図　山脇横穴墓調査区周辺の地形図及び位置 …… 5
第６図　山脇横穴墓土層図 …… 8
第５図　山脇横穴墓平・断立面図 …… 7
第７図　山脇横穴墓玄室内人骨・遺物出土状況 …… 8
第８図　山脇横穴墓出土素文鏡実測図 …… 9
第９図　山脇横穴墓出土鉄刀実測図 …… 9
第10図　山脇横穴墓出土鉄器実測図 …… 10
第11図　道状遺構実測図 …… 11
第12図　長湯横穴墓群６号墓実測図 …… 15
第13図　長湯横穴墓群７号墓実測図 …… 16

表　　目　　次

第１表　遺物観察表（鉄鏃） …… 11
第２表　出土遺物比較表 …… 14
第３表　須恵器実年代比較表 …… 14

巻頭写真図版目次

図版１…調査前の状況、前庭部土層、閉塞状況、前庭部完掘状況、１号人骨出土状況、２号人骨出土状況
図版２…遺物出土状況（鏡・刀子、鉄刀、鉄鏃、鉄鏃）、屍床、玄室内ノミ痕
図版３…古道検出状況、遺跡見学１・２・３、山脇横穴墓
図版４…山脇横穴墓出土遺物

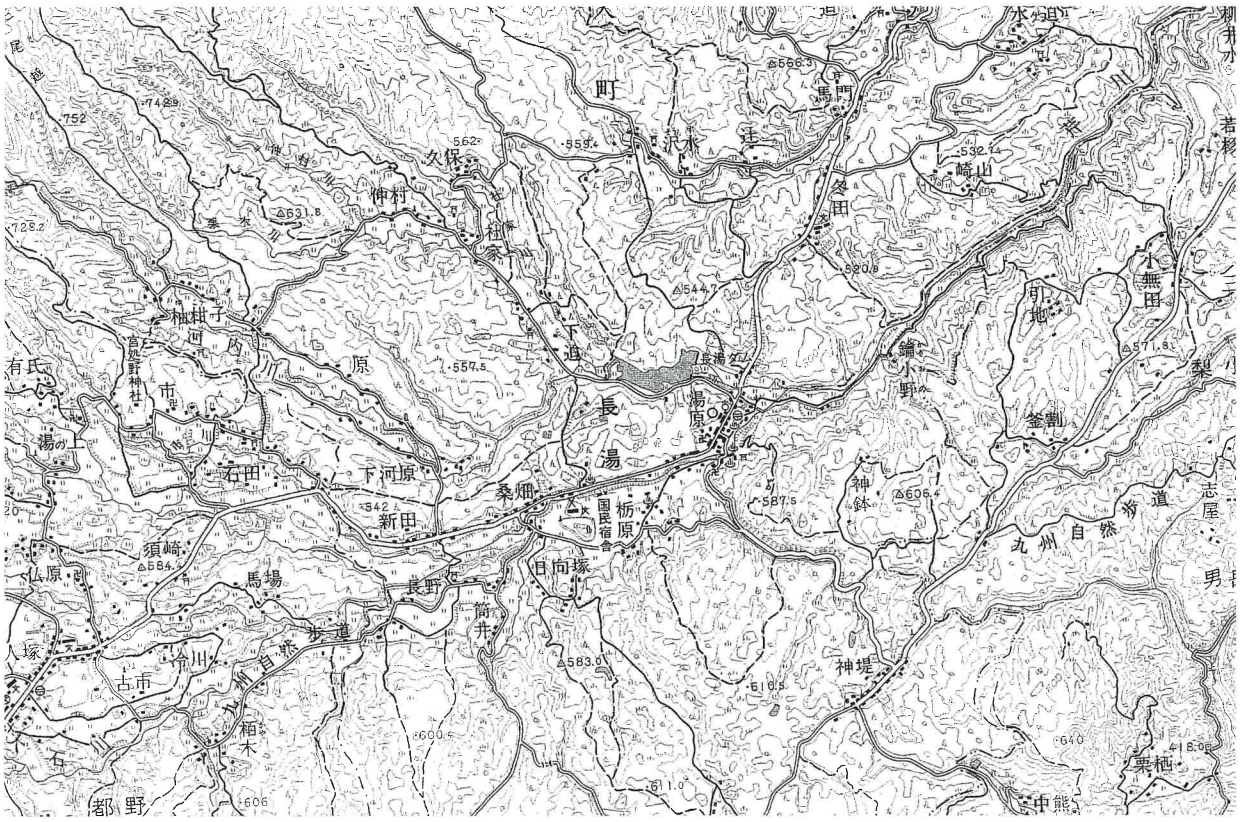
第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

山脇横穴墓は、大分県竹田市直入町大字長湯字山脇に所在する。この遺跡の調査は、主要地方道庄内久住線長湯工区道路改良工事に伴う緊急発掘調査として実施した。主要地方道庄内久住線は、大分郡と直入郡を結ぶ主要道路としてその重要な役割を担ってきた。しかし、道路の幅員の狭さと近年の交通量の増加に伴い、主要地方道としての機能は低下し、特に長湯地区については道路が町の中心部を通ることから拡幅が困難なため、町中心部を迂回するように総延長2.8キロメートルのバイパスが計画され、平成８年度より事業が開始された。この計画に伴い、県土木建築部企画検査室を通じ竹田土木事務所から事前の分布調査の依頼があり、これを受けた県教育委員会文化課では、事前の分布調査や確認・試掘調査を実施し、平成13年度には長湯横穴墓群、平成14年度には桑畑遺跡の本調査を実施している。今回の調査は、平成16年４月７日に長湯横穴墓群から西へ約500mの地点で工事中に横穴墓１基が不時発見されたことに起因するもので、県竹田土木事務所・直入町教育委員会より報告を受けた埋蔵文化財センターでは、緊急に県竹田土木務所と協議を行い、平成16年５月14日～平成16年５月31日の間に本格的な調査を実施することとなった。

第２節　調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育委員会教育長	深田秀生
	大分県教育長埋蔵文化財センター所長	伊藤正行
	調査第一　課長	高橋　徹
	同　主幹	栗田勝弘
	同　副主幹	甲斐寿義（調査担当）
調査委員	田中　良之（九州大学教授）	



第１図　遺跡の位置（国土地理院５万分の１）

第２章　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

山脇横穴墓の所在する直入町は、大分県のほぼ中央、大分川の支流芹川流域にひらけた町で、竹田市の東部、久住連山の西側に位置し、その東側裾部にあたる。西北方向には大船山がそびえ右手前には原生林で覆われた黒岳がせまり、西南方向には鎧ヶ岳を主峰とする大野山地が北東から南西方向に走る。直入町の中心部はこの二つの山地の間にあって、北東から南西方向の長大な断層を伴った独特の帯状地質構造の中に広がる。そしてその西方は久住町都野地区から久住高原へと続き、標高500～600mの高原状の緩傾斜地が開けるが、北東方向は大分市野津原町・由布市庄内町へと開けるものの全般的に高度は下がり、河川の浸食が激しく、深い渓谷で渓流の現れているところが多い。この構造線に沿って直入町の中心部を大分川支流である芹川が流れる。芹川はその源を大船山や黒岳に発し湯原地区で社家川と合流し、さらに下って由布市庄内町で大分川の本流と合流する。直入町のほとんどの遺跡はこの芹川や社家川流域の台地や段丘上に位置しており、原始から古代における多くの足跡を見ることができる。

２．歴史的環境

この地域の歴史は古く、古代においては「豊後風土記」に球覃（くたみ）郷、「日本書紀」に来田見邑、「万葉集」には朽網と記され、また、芹川は「豊後風土記」の湯河にあたり、町の中心部である湯原地区は古くから湯治場として知られている。この地域の考古学的調査は、決して多いものではなく工事中や耕作中に発見され一部が調査されただけであったが（長湯横穴墓群、牧の原遺跡、栃原遺跡）、1982年度から始まった大規模圃場整備事業により、数多くの遺跡の調査が行なわれた（三反田遺跡、長野津留遺跡、横枕遺跡、日向塚遺跡、横枕Ｂ遺跡、前田遺跡など）。

旧石器時代

日向塚や飛竜野で流紋岩や角閃安山岩製の三稜尖頭器や縦長剥片が、長野南口で流紋岩製の剥片、神鉢入口では流紋岩製の石核が出土している。このほか崎山、神堤、栃原などでも剥片が出土し、三反田遺跡では腰岳産と思われる細石核・細石刃が出土している。

縄文時代

早期としては崎山Ｃ遺跡で押型文土器や手向山式土器、山中Ａ遺跡では平栫式土器、戸ノ上遺跡では塞ノ神式土器、三反田遺跡では集石遺構７基が検出されている。前期では戸ノ上遺跡、神ノ原遺跡、大門遺跡などでは轟式土器が、三反田遺跡では轟式以外に曽畑式土器が出土している。中期になると三反田遺跡で船元式が、後期になると戸ノ上遺跡で鐘ヶ崎式土器、三反田遺跡では阿高系土器や小池原上層式、鐘崎式、片粕式、北久根山式土器、横枕遺跡では西平式・三万田式土器などの後期の土器が出土し、横枕遺跡では晩期の方形竪穴住居跡が検出されている。

弥生時代

この時代になると、この地域も大野川上流域と同じように北部九州や肥後、東九州沿岸部や大野川上流域の影響を受けた土器が見られるようになる。神ノ原遺跡では、須玖式土器が・黒髪式土器・下城式土器、辻遺跡では須玖式や下城式土器が採集され、牧ノ原遺跡では弥生時代後期の住居跡二基検出されているが、この時代の大規模な集落遺跡は確認できていない。栃原遺跡では耕作中に弥生時代後期の石棺が発見されている。

古墳時代

長湯横穴墓群、牧ノ原方形周溝墓群や久保方形周溝墓群など墳墓群は確認されているが、隣接する久住町都野地区の千人塚遺跡のような大型の墳丘墓は確認できていない。三反田遺跡、前田遺跡、釘小野遺跡などの集落遺跡や、長野津留遺跡では古墳時代の溝状遺構が確認されており、横穴墓群との関連が注目される。上野地区では銅鏃などが出土している。

以上の記述にあたっては特に次の文献を参照した。

渋谷忠章　　「直入の夜明け」『直入町史』 1984
直入町教育委員会「三反田遺跡発掘調査概報」1985
直入町教育委員会「長野津留遺跡」『直入地区遺跡群発掘調査概報Ｉ』1986
直入町教育委員会「横枕Ｂ遺跡・前田遺跡」1989

番	遺跡名	時代	番	遺跡名	時代	番	遺跡名	時代	番	遺跡名	時代
1	山脇横穴墓	古墳時代	11	前田Ⅲ遺跡	旧石器他	21	筒井遺跡	弥生・古墳	31	社家遺跡群	縄文他
2	長湯横穴墓群	古墳時代	12	栃原石棺群	弥生時代	22	筒井・南遺跡	弥生・古墳	32	向屋敷遺跡	古墳時代
3	桑畑遺跡	縄文時代	13	前田B遺跡	旧石器他	23	石田遺跡	弥生他	33	大門遺跡	縄文・弥生
4	山群遺跡	弥生時代	14	老田遺跡	弥生時代	24	県畜種場遺跡	弥生時代	34	籾山八幡境内遺跡	弥生時代
5	横枕遺跡	縄文時代	15	戸ノ上遺跡	旧石器他	25	新田遺跡	中世	35	小城原遺跡	弥生時代
6	横枕B遺跡	縄文時代他	16	長野西遺跡	縄文時代	26	経塚遺跡	旧石器他	36	塔の原遺跡	縄文・弥生
7	日向塚遺跡	旧石器他	17	長野久保遺跡	縄文他	27	花立遺跡	旧石器他	37	有氏遺跡	弥生時代
8	三反田遺跡	旧石器他	18	長野津留遺跡	縄文・弥生	28	龍宮寺遺跡	旧石器他			
9	栃原A遺跡	縄文他	19	長野遺跡	縄文他	29	古殿遺跡	縄文他			
10	前田Ⅰ遺跡	旧石器他	20	春の台遺跡	近世	30	原遺跡	縄文他			

第２図　山脇横穴墓と周辺の遺跡

第３章　山脇横穴墓群の調査

第１節　報告にあたって

１、横穴墓等の名称

横穴墓の名称については、明治期に吉見百穴を巡る坪井正五郎氏の穴居説と白井光太郎氏の墓穴説の論争に始まるが、現在では有力家族墓の一形態として位置づけられている。今回調査した山脇横穴墓の形態は、明らかに埋葬施設であることから「横穴」と呼称するものではなく、「横穴墓」の名称を用いることとする。

つづいて、横穴墓各部の名称についてであるが、上ノ原横穴墓群で用いられた名称を踏襲するが、羨門前方部の掘削部については前庭部で統一することとする。玄室平面形態・天井形・屍床については、基本的には池邉千太郎氏の分類に従って分類する（註１）。

玄室平面形態

１　方形・・玄室の奥行と幅がほぼ同じである。
２　妻入り長方形・・玄室の奥行が幅よりも長い
３　平入り長方形・・玄室の奥行よりも幅が広いもの
４　小形・・玄室と羨道の境もなく埋葬する空間を持たないもの

天井形

１、寄棟形　２、鴨居形　３、切妻形　４、四角錐方形　５、尖頭形　６、平方　７、アーチ形
８、平天井形　９、ドーム形

屍床

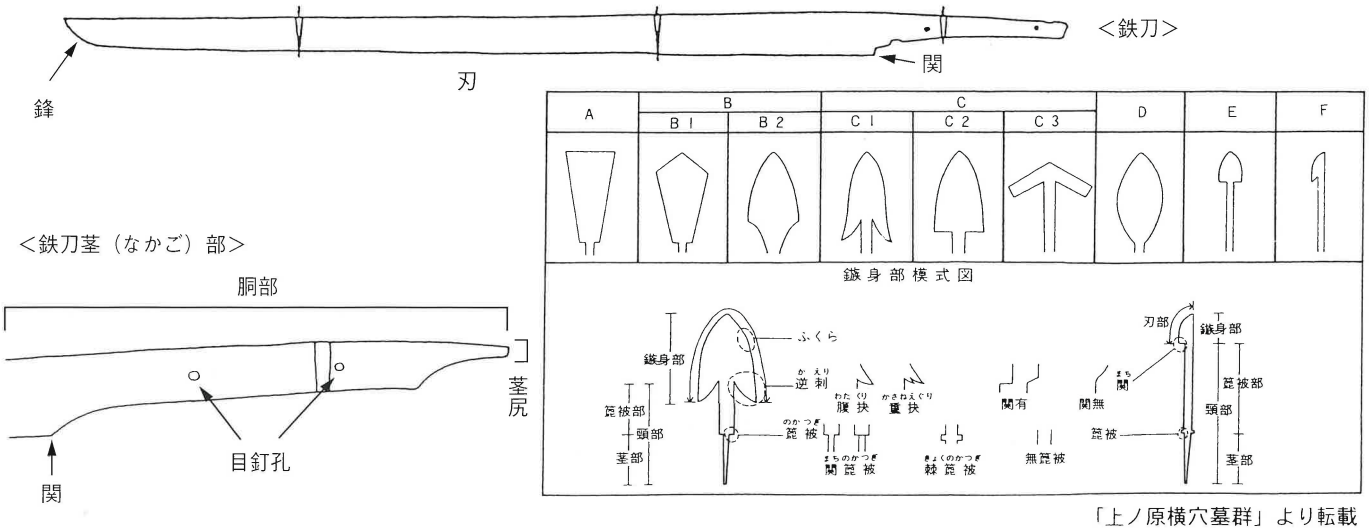
Ⅰ類　奥壁に平行して奥壁に接して造られるもの
Ⅱ類　奥壁に直行して玄室の片側に造られるもの
Ⅲ類　奥壁に直行して玄室の両側に造られるもの
Ⅳ類　玄室を取り巻くようにコ字形に造られるもの

４、発掘調査の方法

近年の横穴墓の調査で、横穴墓の墓道には墓前祭祀や追葬の痕跡が残されていることが明らかとなり、今回の調査でも前庭部については慎重に調査を行うこととした。遺物はなるべく原位置で捉えることとし、土層については縦方向に断面を残し、土層観察を行うことを原則とした。玄室内の遺物については、原位置で採り上げることを基本にしたが、床面の覆土ついては土嚢袋に採集し篩いにかけ遺物の検出を行った。

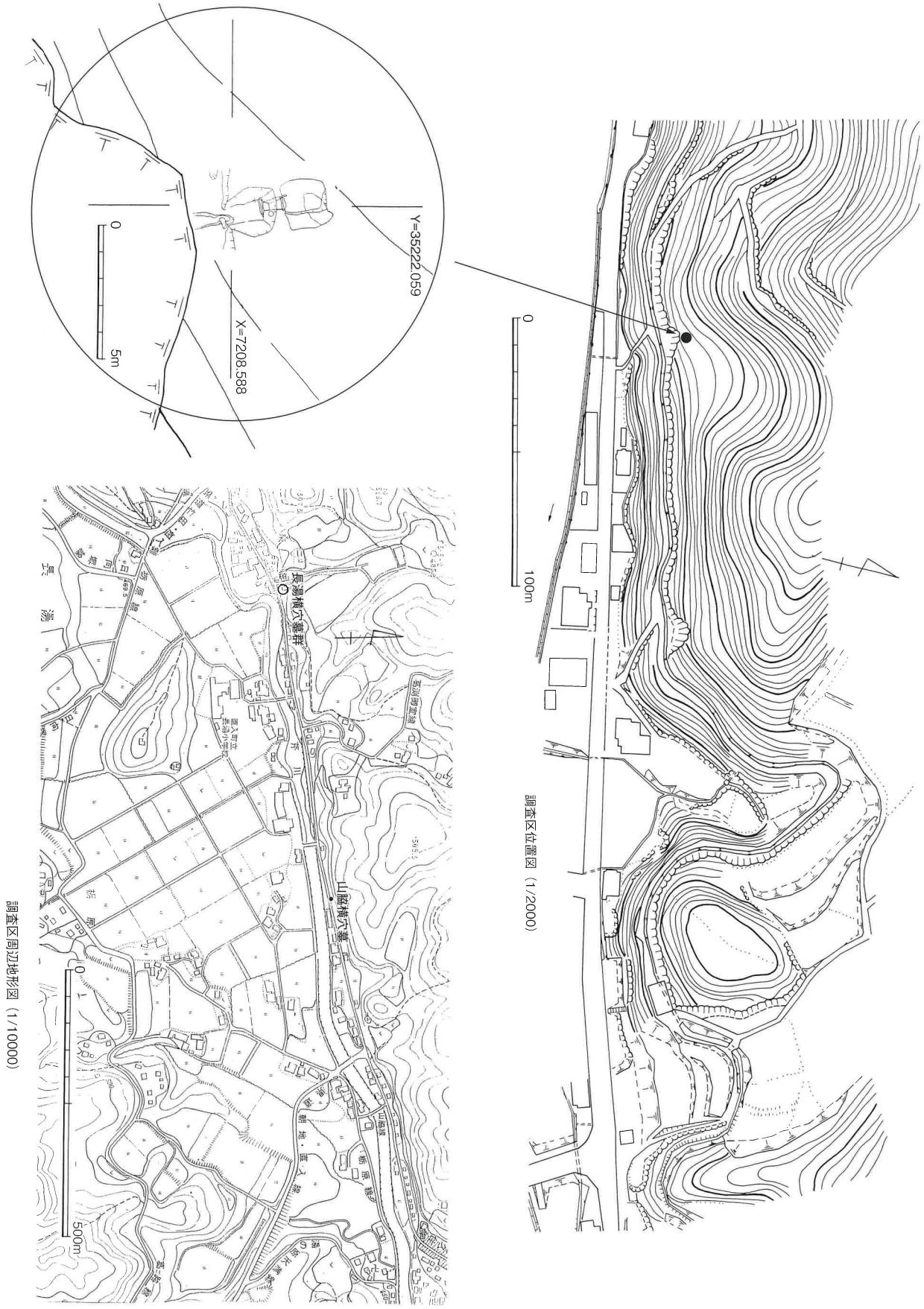
なお、埋葬人骨については埋葬順位、年齢性別を明らかにし、被葬者の性格や集団構成などを検討するために九州大学基層構造学講座の田中良之教授に採り上げ・鑑定を依頼した。

註１）池邉千太郎　2001「豊後地域における横穴墓の様相」『九州の横穴墓と地下式横穴墓　第１分冊』九州前方後円墳研究会



「上ノ原横穴墓群」より転載

第３図　各部位の名称



第４図　調査区周辺地形図及び位置図

第２節　発掘調査の記録

１、調査経過と概要

山脇横穴墓群は、町の中心部を東西に流れる芦川左岸の丘陵縁辺標高約471ｍに位置する。約500ｍ西には長湯横穴墓群が位置しており、この横穴墓群は明治７年に２基、昭和16～17年に数基発見され、銅釧･金環･切子玉･ガラス小玉や鉄鏃・刀子・鉄刀などが発見されたという記録があり、平成13年（2001）には、主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴い10月29日から翌年の１月25日の間、調査が実施され、９基の横穴墓を確認し、玄室や前庭部から多くの遺物と19体を越える埋葬人骨を検出している。

山脇横穴墓が所在する場所は、丘陵先端部の上面に位置し、急峻な崖面が川に迫っている場所であることから、従来より遺跡の存在する可能性が低い場所とされていた。しかし、工事中に横穴墓の天井部が陥没し、不時発見されたことによりその存在が明らかとなった。

調査は平成16年５月14日～平成16年５月31日の間に実施した。調査は天井が一部崩落し土砂が流入していたので、前庭部の検出・調査と同時に土砂除去作業を行い、玄室内の調査を行った。その結果、玄室内から２体の人骨と、鉄鏃･直刀･素文鏡などの副葬品を検出し、また前庭部では前庭部を横切るように作られた古道も検出した。

２、遺構と遺物

(1)　立地、調査前の状況

山脇横穴墓は、標高約471ｍの急峻な崖面に位置する。掘削工事中に玄室天井部が崩落したことによりその存在が明らかとなった。阿蘇溶結凝灰岩に掘り込まれており、古道により前庭部先端は破壊されているため、現状で全長約3.84ｍを測り、主軸はＮ－12°－Ｗにとる。保存状態は良好で、前庭部は完全に埋没しており、地表での確認はできなかった。

(2)　前庭部

①規模・構造（第30図）

遺存する前庭部は、平面は隅丸の羽子板形で立面は逆台形を示す。全長は現状で1.48ｍ、羨門部上部幅が1.54ｍ、底面幅0.89ｍを測る。床面はほぼ平坦である。前庭部最深部は約60°前後の傾斜をもつ壁となり側壁の傾斜は69°前後で立ち上がる。羨門は前庭部最深部の壁やや左寄りに穿れており、羨門高0.42ｍ、幅は0.36ｍを測る。閉塞施設は川原石を使用している。羨門壁には赤色顔料が塗布されていた。また、前庭部入り口付近から崖面に向け排水溝が掘り込まれる。古道により底面付近まで削平されており、現存で長さ1.6ｍを測る。

②前庭部土層（第29図）

前庭部の土層は、古道等により若干の撹乱を受けていたが、比較的明瞭な層区分が可能な状態で４層８細別層群に分層できた。以下堆積順に説明を加える。

第１層　灰黄褐色土層。粘質はなく硬くしまっている。黄色、灰色ブロックを含む。

第２層　暗褐色土層。しまりはやや強い。凝灰岩を含み傾斜して堆積する。

ａ・・・黄色・灰色のブロックを含む。

ｂ・・・ａよりも黄色が強く８㎝大の凝灰岩を含む。

ｃ・・・細かい凝灰岩のブロックを含む。しまりが強いが粘質はなし。

第３層　暗褐色土層。しまりはあまりない。閉塞石を覆うように傾斜して堆積する。追葬後の二次堆積である。

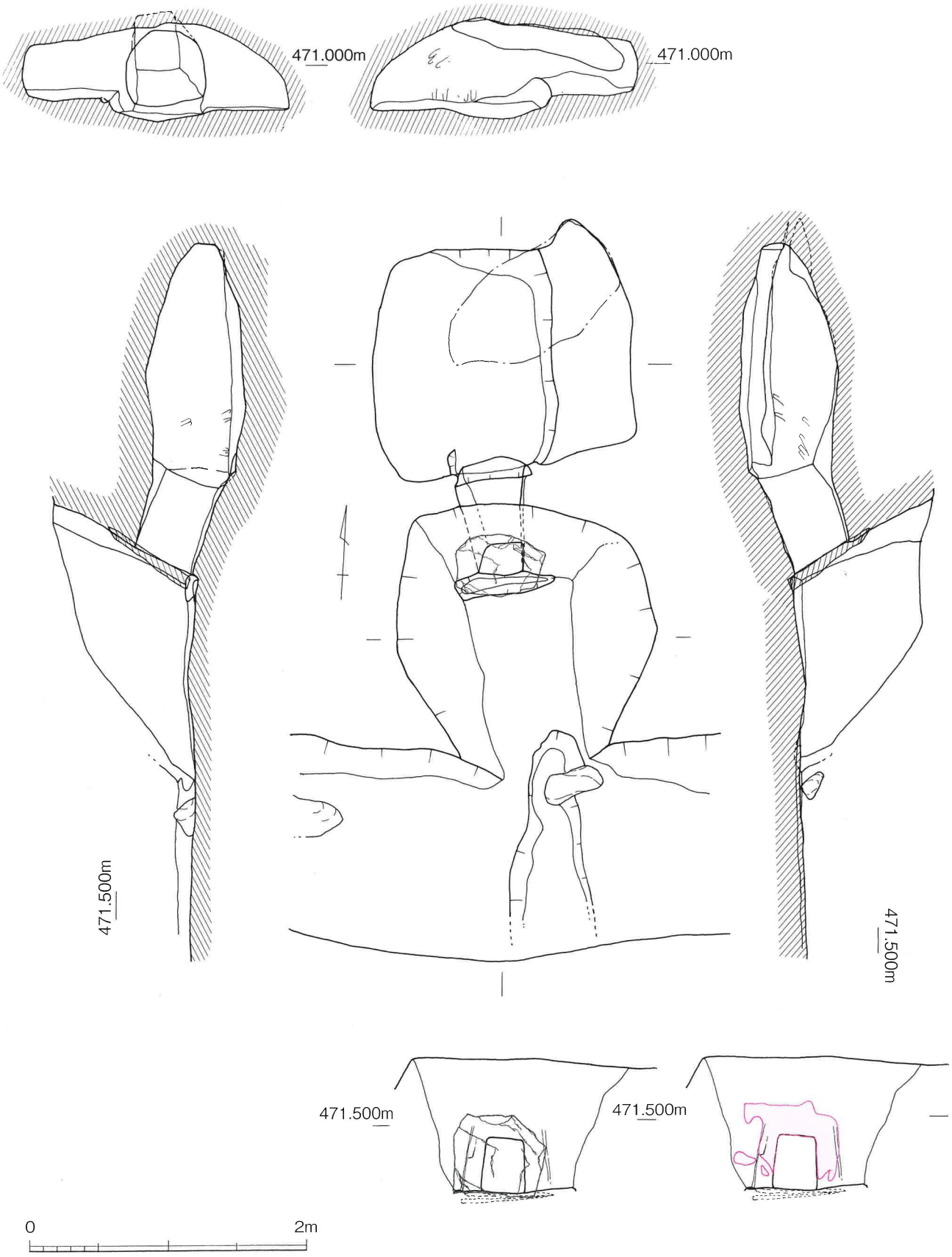
ａ・・・細かい凝灰岩のブロックを含む。

ｂ・・・ａよりも黄色が強く５～６㎝大の凝灰岩を含む。

ｃ・・・しまりが強いが粘質はなし。やや褐色が強く凝灰岩のブロックを若干含む。

第４層　灰白色土層。凝灰岩のブロックを多量に含み、しまり･粘質ともになし。初葬後の二次堆積である。

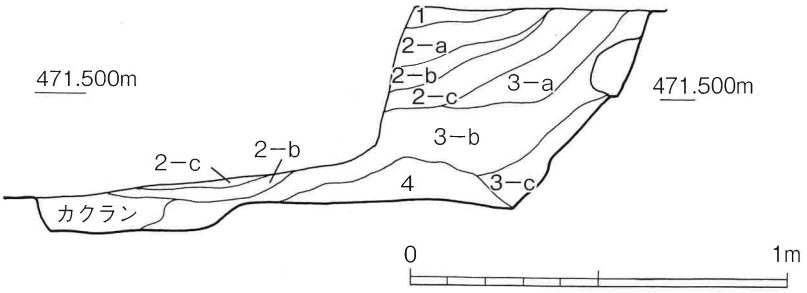
以上のことから、本横穴墓では２回の埋葬行為が認められた。



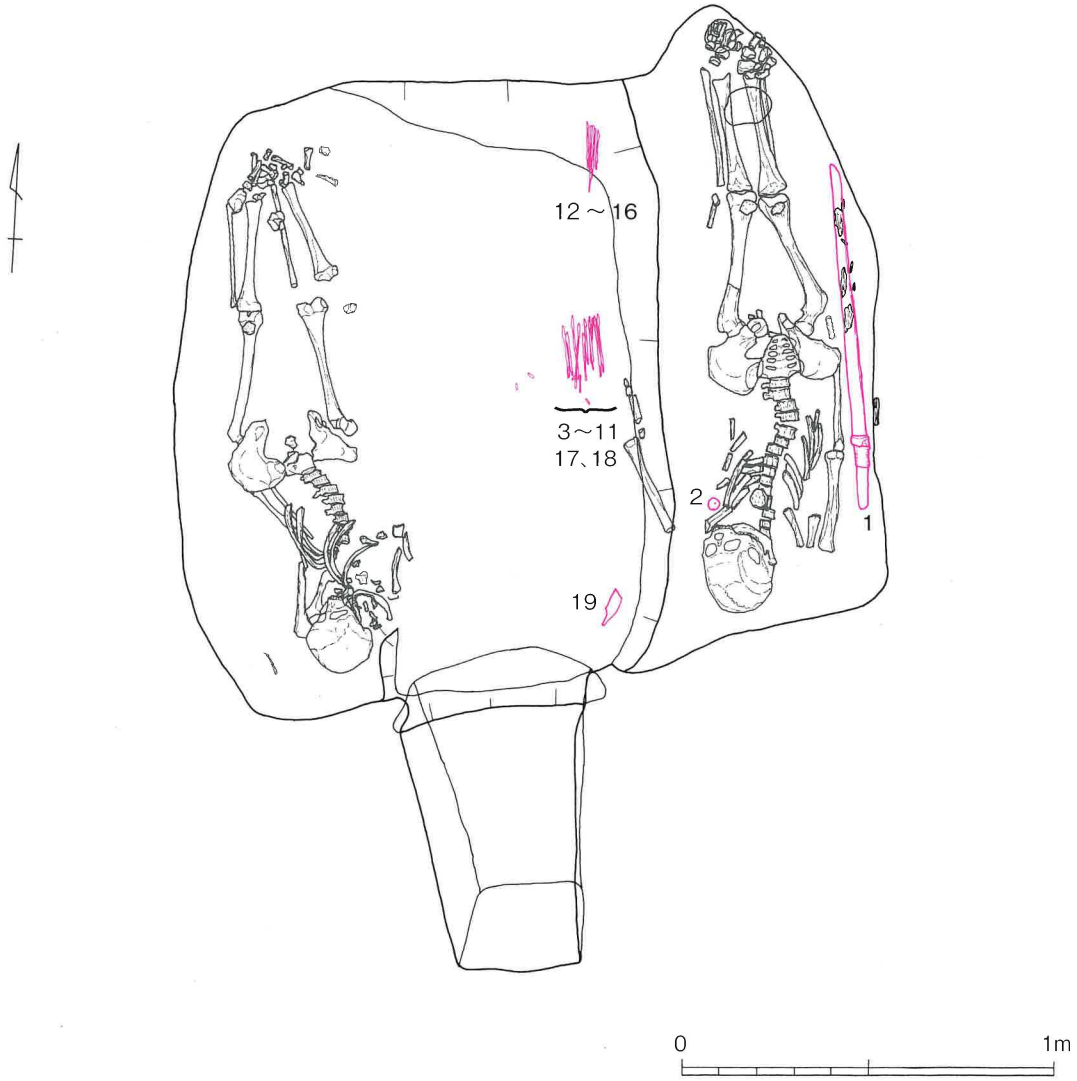
第５図　山脇横穴墓　平・断・立面図（1/40）

(3) 羨道、玄室（第30図）

羨道の立面および平面は台形を呈しており、長さは0.74mで、玄門は不整円で高さ0.54m、玄門幅は中央部やや下位で最大幅を測り0.54mである。羨道は約23°の角度で玄室へと下り、玄門と玄室床面には約0.11mの段差が認められる。玄室は長さ1.62m、裾部幅1.72m、奥壁1.52mを測る隅丸方形で、床面は中央部をやや掘り窪めることにより、屍床状の平坦面（奥壁に向かって左）やテラス（右）を有す。天井部はアーチ型で床面からの高さは玄室中央付近で最大となり0.68mを測る。右側壁はほぼ素直に立ち上がる。



第６図　山脇横穴墓　前庭部土層断面図（1/20）



第７図　山脇横穴墓　玄室内人骨・遺物出土状況（1/20）

(4) 出土した遺物

①前庭部

前庭部からは遺物は出土しなかった。

②玄室内

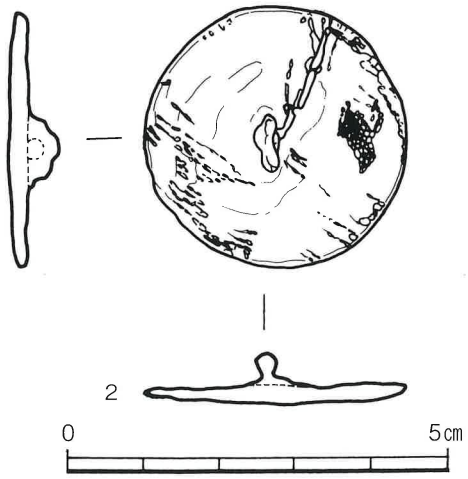
・出土状況

a）埋葬人骨　玄室奥壁に向かって右側の屍床に熟年男性１体（１号人骨）左側に熟年後半女性１体(２号人骨)、が頭部を羨門に向けた仰臥伸展葬で埋葬されていた。埋葬時の状態を保っており遺存状態も良好である。詳細については別項に譲る。

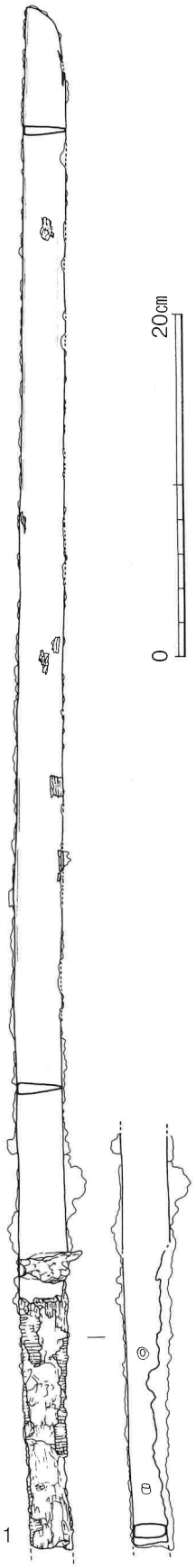
b）副葬品　玄室内からは、鹿角装直刀や刀子，鉄鏃の武器類および銅製の鏡が出土している。刀子は玄門付近、直刀は２号人骨左上腕部付近に刃先を奥壁に向けて置かれた状態で、鉄族はいずれも長頸鏃で２号人骨左腰部付近と足下に刃先を奥壁に向けて出土した。鏡は左鎖骨付近で検出し、１号人骨周辺からは遺物は検出しなかった。

・出土遺物（第８・９図）

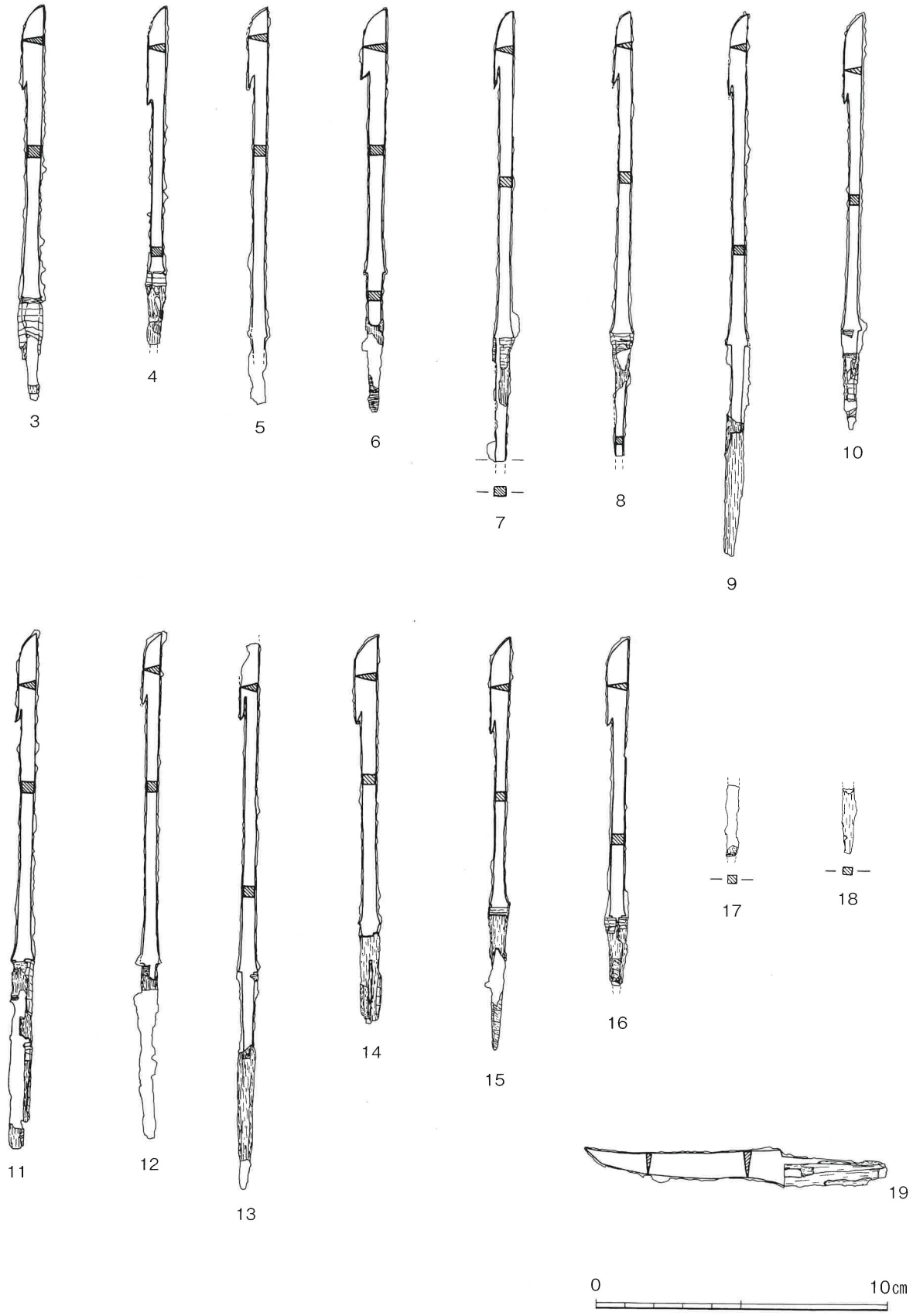
１は平造の直刀である。奥壁に向かって右壁際で出土した。２号人骨上腕部から右大腿部にかけて平行するように置かれていた。全長は90.8cmを測り、刀身はやや内反り気味で、長さは73.7cm、幅は切先付近で2.4cm、茎付近で2.8cm、厚さは切先付近で0.4cm、茎付近で0.6cmを測る。断面は二等辺三角形で、鎬は認められない。茎（なかご）部の断面は方形で長さ17.1cm、幅2.0～1.8cm、厚さ0.7cmを測る。関（まち）部は撫角の片関で、目釘穴が２箇所認められるが、茎尻部は鏨状の工具で断ち切られており形状は不明である。柄木には紐を巻いて覆っており、茎部関付近には鹿角が付着していることから、本来は鹿角製の刀装具が装着されていたのであろう。刀身の両面には木質の組織痕が残る。２は、完形の素文鏡である。径は3.4cm～3.5cmのほぼ円形で、鏡背中央の鈕（ちゅう）には紐の痕跡が残存する。またこの鏡背には布目も付着している。３～18は鉄鏃である。３～16はいずれも長鏃で、鏃身部の片側にのみ刃部を有す片刃箭式（かたばみやしき）である。いずれも腹抉（わたくり）の逆刺（かえり）を有す。茎部には矢柄の木質の組織痕や矢柄と鉄鏃を固定するために巻いた木皮が残存する。17・18は頚部片で、16には木質の組織痕が残る。19は刀子である。全長は現存で10.6cmを測り、刀身はやや内反り気味で、長さは6.8cm、幅は切先付近で0.6cm、茎付近で1.1cm、断面は二等辺三角形で鎬は認められない。厚さは切先付近で0.2cm、茎付近で0.3cmを測る。



第８図　山脇横穴墓出土　素文鏡実測図



第９図　山脇横穴墓出土
鉄刀実測図（1/4）

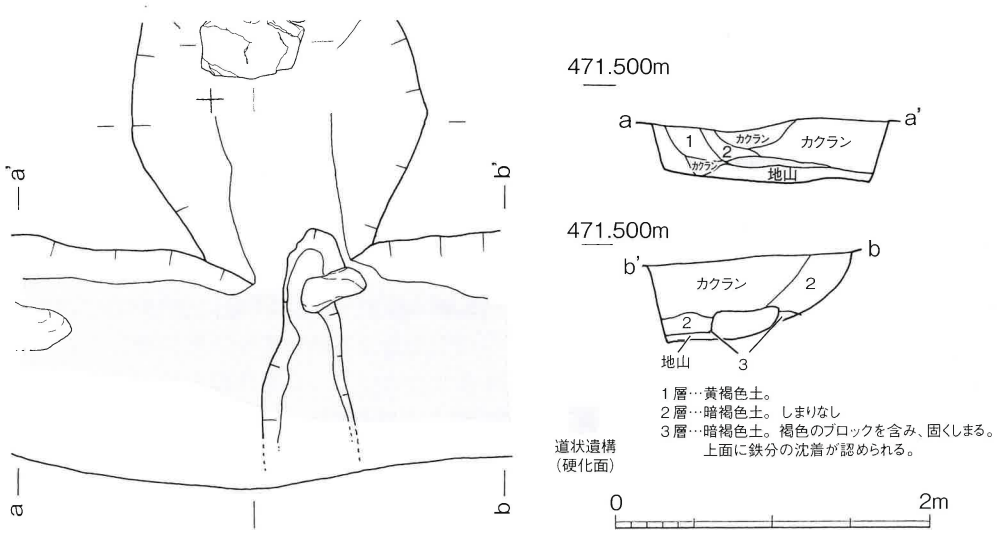


第10図　山脇横穴墓出土　鉄器（1/2）

番号	器　種	全　長 (cm)	刃部長 (cm)	刃　部 幅 (cm) 厚 (cm)	箆被部 長 (cm) 厚 (cm)	茎　部 長(cm)	重さ(g)	備　　考
3	鉄鏃	13.7	2.9	0.75 0.28	7.3 3.2	3.5	12.3	茎部一部欠損　桜樹皮残存
4	鉄鏃	2.75	—	—	—	—	0.8	茎片
5	鉄鏃	2.29	—	—	—	—	0.5	茎片
6	鉄鏃	12	3.4	0.7 0.3	6.3 0.3	7	8.3	茎部一部欠損　桜樹皮残存
7	鉄鏃	13.8	2.4	0.7 0.32	7.1 0.3	4.3	14.2	ほぼ完形品　桜樹皮残存
8	鉄鏃	13.5	2.8	0.7 0.3	9.3	1.4	13.4	茎部一部欠損　桜樹皮残存
9	鉄鏃	18.8	2.9	0.58 0.3	8.9 0.4	7	15.4	ほぼ完形品　桜樹皮残存
10	鉄鏃	15.4	2.6	0.6 0.3	9.2 0.35	3.6	15.2	茎部一部欠損　桜樹皮残存
11	鉄鏃	15.3	2.5	0.6 0.3	8.9 0.4	3.9	12.3	茎部一部欠損　桜樹皮残存
12	鉄鏃	17.4	2.3	0.6 0.3	9.5 0.4	5.6	15	茎部一部欠損　桜樹皮残存
13	鉄鏃	14.2	3.1	0.68 0.29	8 0.35	3.1	11.5	ほぼ完形品　桜樹皮残存
14	鉄鏃	17.8	3.2	0.8 0.35	8.4 0.4	6.2	17.8	茎部一部欠損　桜樹皮残存
15	鉄鏃	18.7	2.5	0.6 0.25	9.2 0.3	7	15.9	ほぼ完形品　桜樹皮残存
16	鉄鏃	13.4	3	0.8 0.28	7.5 0.36	2.9	11.9	ほぼ完形品　桜樹皮残存
17	鉄鏃	14.1	3.2	0.7 0.3	6.5 0.31	4.4	9.3	完形品　桜樹皮残存
18	鉄鏃	11.8	2.95	0.78 0.3	6.95 0.35	1.9	10.7	茎部一部欠損　桜樹皮残存
19	刀子	10.2	6.7	—	—	3.5	9.2	完形品　茎部に鹿角残存

(5)　道状遺構

道状遺構は、山脇横穴墓の前庭部先端や排水溝を削平し、斜面に沿って東西方向へ走る。すでに埋没しており、表面で遺構は観察できず、前庭部の調査中に確認した。この道状の遺構は、まず地山面まで削平した後、幅0.58m～0.9mにわたって暗褐色土を客土して硬化面を形成する。遺物等は出土せず時期不明であるが、山脇横穴墓の先端部を削平していることから、それに伴うものではないが、南斜面に沿うように道状の遺構が伸びることから他の横穴墓の墓道としての可能性は否定できない。



第11図　道状遺構実測図（1/40）

第3節　考　察

⑴　横穴墓の時期と形態について

山脇横穴墓は竹田市直入町大字長湯に位置する。この横穴墓の西方約500mには、直入地域では最大の横穴墓群である長湯横穴墓群が存在する。平成13年度には、この長湯横穴墓群の調査が実施されており、墓道（前庭部）・玄室平面形態・天井形態・屍床の各部位を主要構成要素とし、羨道と玄室の間の段差を加え、横穴墓の分類が行われている。その分類にしたがって山脇横穴墓を分類すると、玄室平面形態は隅丸の方形で玄室の奥行と幅がほぼ同じタイプである。天井形はアーチ形、屍床については　奥壁に平行して奥壁に接して造られるもので、長湯横穴墓群の形態分類では妻入り隅丸方形（台形）のBタイプとなる。同タイプのものは長湯横穴墓群６号墓（第12図）が相当する。この６号墓については長湯横穴墓群では初期の横穴墓とされ、出土した遺物などから６世紀前半までに位置付けられている。

⑵　出土した遺物について

山脇横穴墓では、すでに報告したとおり玄室内から直刀・鉄鏃・刀子・小型の鏡が出土した。これらの遺物は、プライマリーな状態での出土であり、この横穴墓の造営時期等を解明する上でたいへん貴重な資料といえる。ここでは比較的時期の比定しやすい直刀・鉄鏃・鏡について説明を加える。

• 鉄刀について

本文で報告したように、今回出土した直刀には鹿角製刀装具が装着される。しかし、遺存状態がよくないため直弧文が施されているかどうか確認できない。ところで古墳時代の直刀については、刀の茎の形状によってすでに編年が行われており（註１）、その時期がある程度比定できる。今回出土した直刀をみると、目釘穴は２ヶ所、片関で撫角、茎尻は切断されそのため形状は不明であるが、胴部は関から浅く切れこみ茎尻にかけてやや幅をせばめる中細の形状に近い。この形状を有す平造り直刀は５世紀後半に位置づけられており（註２）、これは鹿角製刀剣装具が盛行するのが５世紀であることからみても時期的な一致をみることができる。

さて、本文で述べたように、今回出土した直刀については柄頭が切断された状況で玄室内から出土した。このような状況は長湯横穴墓群だけでなく県内をみても類例はなく、単純に、副葬するスペースの問題で切断した可能性も考えられる。しかし、直刀については、『延喜式』軍防令では将軍に、『続日本紀』では遣唐使に節刀を賜る規定や記事があるように、外交軍事上の全権を受けたものに節刀を賜ることにより戦闘や外交に対する権限を委譲する意味があったこと（註３）、『日本書紀』の天智３年（664）２月のいわゆる甲子の宣では、冠位二十六階の規定に続けて“大氏、小氏、伴造等の氏上に、それぞれ大刀、[※1]小刀、弓矢・盾を賜う”記事があり、官吏として冠を受ける人間は氏上の証しとして大刀などの武器が必要とされたこと、また、群集墳から出土する装飾付大刀については、大阪府塚原古墳群の調査成果から、装飾的な金銅製の大刀を持つものが「組織の頂点」に立つこと（註４）など、大刀はそれを所有する者のステイタスシンボルであることが明らかになってきている（註５）。そのステイタスシンボルである大刀の、身に付けたときに人目に触れやすく、被葬者の社会的地位を示すであろう特徴的な柄頭を切断するということは、スペースの問題以外にもっと別な意図が存在するように思える。それが装飾的な大刀の持つシンボル性の継承を意味するものなのか、ただ単にその直刀の終焉を意味するものなのか、また死霊を玄室内へ閉じ込める「コトドワタシ[※2]」の儀礼なのかは今回の調査で明らかにできなかったが、今後のこのような調査例が増加することによりその理由が明らかになってくるものと思われる。

※１　古墳時代の直刀は、平安時代以降の「太刀（たち）」と区別するため「大刀（たち）」と表記する。（三宅正浩「大刀と装飾」『金の大刀と銀の大刀』大阪府立ちかつ飛鳥博物館　1996）

※２　土器などを副葬して、ほうむられた人に死者と生者の別離を宣言する儀式（「コトドワタシ考－横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって－」『橿原考古学研究所論集　創立三十五周年記念』吉川弘文館　1975）

• 鉄鏃について

今回出土した鉄鏃はいずれも長頸鏃の鏃身部の片側にのみ刃部を持つ片刃箭式（かたばみやしき）であり、いずれも腹抉（わたくり）の逆刺（かえり）を有し、関（まち）は台形である。台形の関については５世紀の第４四半期に登場し、６世紀の第１四半期になると直角の関が主流になり、逆刺（かえり）については６世紀の第１四半期になると短いものが主流になるといわれ（註６）、また、北部九州の鉄鏃の編年をみると、片刃箭式はＦ類（片刃類）に分類され、Ｆ類の逆刺が浅くなるのは５世紀後半から６世紀はじめと位置づけられている（註７）。また、中津市上の原横穴墓でもこのＦ類は初期横穴墓に多いという所見を得ていることからみても、今回出土した鉄鏃

は５世紀末～６世紀初頭に位置づけてもよいと考える。

・鏡について

今回出土した鏡は鏡背に文様の施されない素文鏡である。紐は存在するが平縁は存在せず、紐付の円盤状の形態を呈す。横穴墓から素文鏡が出土した例は日田市の夕田横穴墓群から出土した例が知られる。今回出土した素文鏡は夕田横穴墓群から出土したもの（径5.5cm）に比べ径が3.6cmと小型である。九州内では、宮崎県児湯郡新富町の隅ヶ迫横穴墓や宮崎県宮崎市の蓮ヶ池横穴墓から出土した２例が知られる（註８）。

次にこの素文鏡の時期であるが、共伴する鉄鏃等の遺物がほぼ５世後半～６世紀初頭頃に比定されることからほぼ同時期のものと考えられる。これは豊後地方において鏡が横穴墓に副葬される時期であるＴＫ208～ＴＫ47（田辺編年）（註９）とほぼ一致するものであり、鏡を副葬する習慣の最終段階の時期のものであろう。

ところで、この素文鏡の性格であるが、素文鏡は、弥生時代後期終末に出現する重圏文鏡の面径が縮小することによって文様のスペースを失い出現したもので、まれに古墳副葬例があるものの、多くは住居跡や祭祀遺構から出土しており、祭祀具としての性格をもつ、いわゆる儀鏡としての性格が強いと考えられている（註10）が、今回出土した素文鏡は、織物の痕跡が残るなど、袋に入れて丁寧に副葬されていることからみても、祭祀具というより呪術的権威の象徴として副葬された可能性が高い。

(3) まとめ

以上、今回の調査結果についてまとめてみたが、山脇横穴墓は５世紀末～６世紀初頭に造墓されたもので、玄室の壁面には赤色顔料は認められないものの、その形態からいわゆる「初期横穴墓」の可能性が高い。この横穴墓の約500m西にはこの地域最大の横穴墓群である長湯横穴墓群が存在するが、ここも２基の初期横穴墓が確認されており（註11）、今回の発見でこの地域では３例目の初期横穴墓となった。この初期横穴墓であるが、竹田・直入・大野地域においては十六山横穴墓や稲荷山横穴墓のように丘陵の中腹に単独で１基ずつ造営される傾向があり（註12）、長湯横穴墓群でも同様の傾向が看取でき、山脇横穴墓についても今回の調査ではその周辺に横穴墓は確認できなかったことから、単独で造営された可能性が高い。

次に、長湯横穴墓群と山脇横穴墓群の関係であるが、両者の間に約500mという距離の隔たりがあり、また、その間には小解析谷が存在するなど直接的な関係を求めるにはやや難がある。しかし、これらの横穴墓の対岸には、古墳時代の集落遺跡である「三反田遺跡」「前田Ⅰ遺跡」「前田Ⅲ遺跡」などが展開しており、山脇横穴墓の造墓主体も対岸に展開する集落遺跡に居住していた可能性が高く、この横穴墓も長湯横穴墓群の支群として捉えても問題ないと考える。ところで、大阪府塚原古墳群では、その出土遺物の組み合わせから四段階の階層差を群集墳内に見出している（註13）。第２表は長湯横穴墓群や山脇横穴墓の玄室内から出土した遺物をまとめたものであるが、分類すると、１、武器を持つものと持たないもの。２、鉄鏃を持つものと持たないもの。３、２に加えて刀剣類を持つもの、持たないもの。４、装飾刀剣類を持つもの、持たないものにグルーピングできる。１・２については横穴墓群全体を通じて認められる状況であるが、３・４の刀剣類については「６世紀中頃」を境にして、その副葬が認められなくなる。この時期は、豊後地方において横穴墓が増加する時期と重なっており、副葬品の変化は被葬者層の増加に伴うものと考えられるが、しかし、直入・大野地方では大分平野の様に爆発的に横穴墓が増加した状況は認められず、被葬者層の増加というよりも、たとえばこの地域が「直入の県」設置に伴い「部民」化が進んだという指摘（註14）や『磐井の乱』後には物部氏の部民化が進んだともいわれる（註15）ように、『磐井の乱』後、横穴墓を取り巻く支配体制に大きな変化が生じた結果、地域の有力者層が威信財の所持を許されなくなった可能性も考えられるのではないだろうか。そうした社会情勢との関連が注目される。また、同一世代でのグルーピングはできなかったものの、副葬品の有無や刀剣類の有無は塚原古墳と同様に階層性を認めるものであり、刀剣類を所有する横穴墓（長湯６号墓・７号墓・山脇横穴墓）の副葬品を比較しても、長湯７号墓（第13図）のように優越した副葬品を所持するなど、その中にもさらに高い階層が存在する可能性が窺える。直入・大野地域のように横穴式石室墳が希薄な地域においては、長湯７号墓の被葬者のように装飾刀剣類や特殊遺物を所有するものは共同体組織の頂点に立つものである可能性が高い。いずれにしても、武器の所有は共同体に軍事的組織が存在した可能性を示すものである。なかでも山脇脇横穴墓の被葬者のように権威の象徴である直刀や鏡を所持する被葬者は、共同体の有力者の一人であり、武人であった可能性が高いと考える。

最後になるが、山脇横穴墓の発見は、長湯横穴墓群の範囲や成立過程を考える上で非常に重要なものとなった。しかし、本来横穴墓が存在しないと考えられた地区において横穴墓が発見されたことは、その周辺に後世の開発による破壊を免れた横穴墓がまだ存在する可能性を示唆するものであり、今後、開発に際してはより細かな事前調査が必要であることを付け加えるとともに、調査中に御支援・御協力をいただいた直入町教育委員会（当時）に感謝の意を表してまとめとする。

第２表　出土遺物比較表

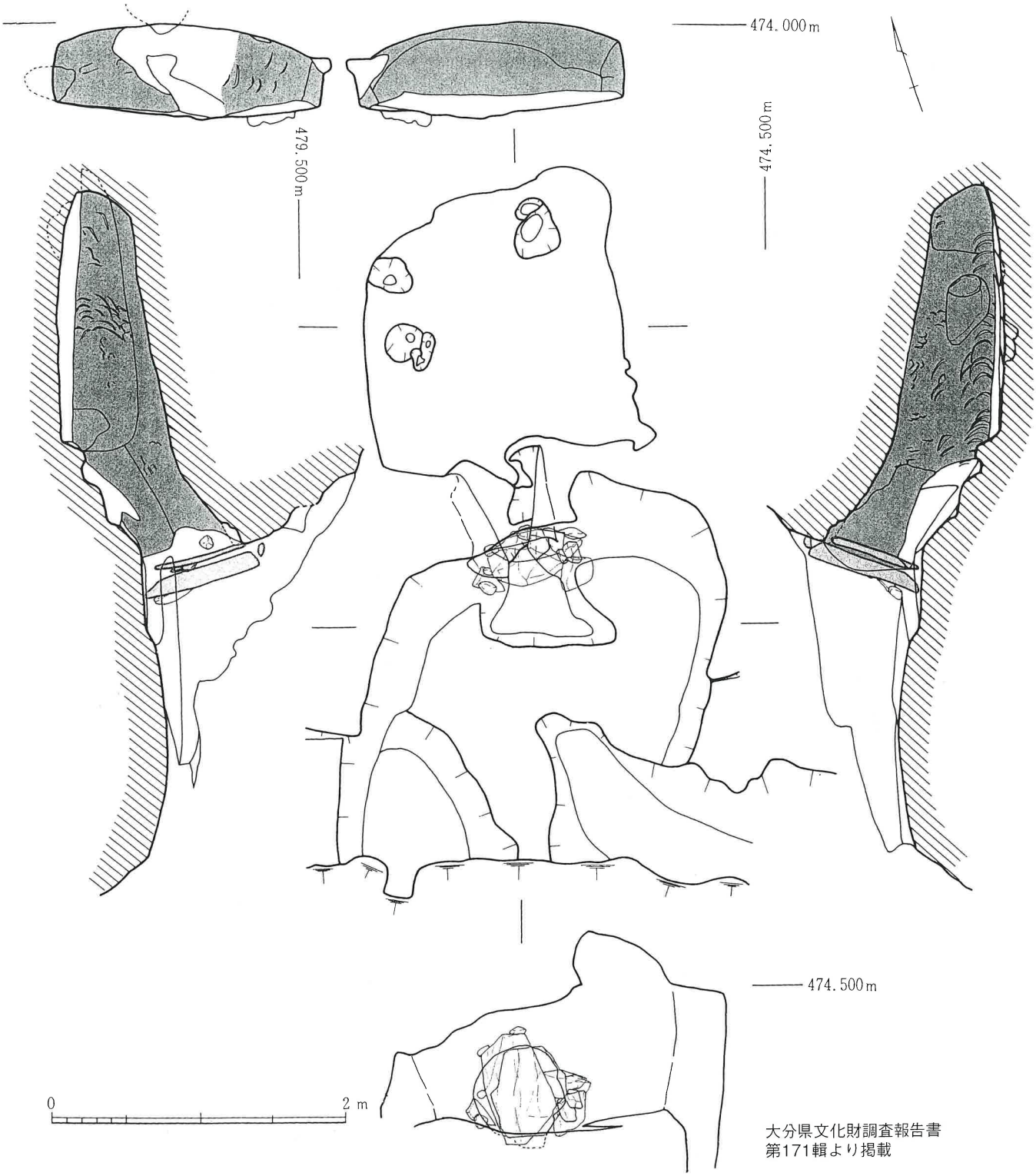
横穴墓	人骨番号	副葬品							
		鉄刀	鉄剣	鉄鏃	弓	馬具	刀子	特殊遺物	須恵器
馬湯２号墓 (MT85～TK43)	１号人骨			○					
	２号人骨			○			○		○
長湯３号墓 (MT15～TK43)	?			○	○	○	○	銅釧・耳環・管玉	
長湯６号墓 (MT15 ?)	１号人骨		○(蛇行剣)	○			○		
	２号人骨								
長湯７号墓 (TK10)	１号人骨	○(鹿角装)	○(鹿角装)他					貝輪・貝製品・ガラス玉	
	２号人骨								
	３号人骨								
山脇横穴墓 (MT15 ?)	１号人骨								
	２号人骨	○(鹿角装)		○			○	素文鏡	

第３表　須恵器実年代比較表

実年代(西暦)	500年		550年		600年		650年	
田辺編年	ＴＫ47	ＭＴ15	ＴＫ10	ＭＴ85	ＴＫ43	ＴＫ209	ＴＫ217	ＴＫ46
小田編年	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ－Ａ期		Ⅲ－Ｂ期	Ⅳ期	Ⅴ期	

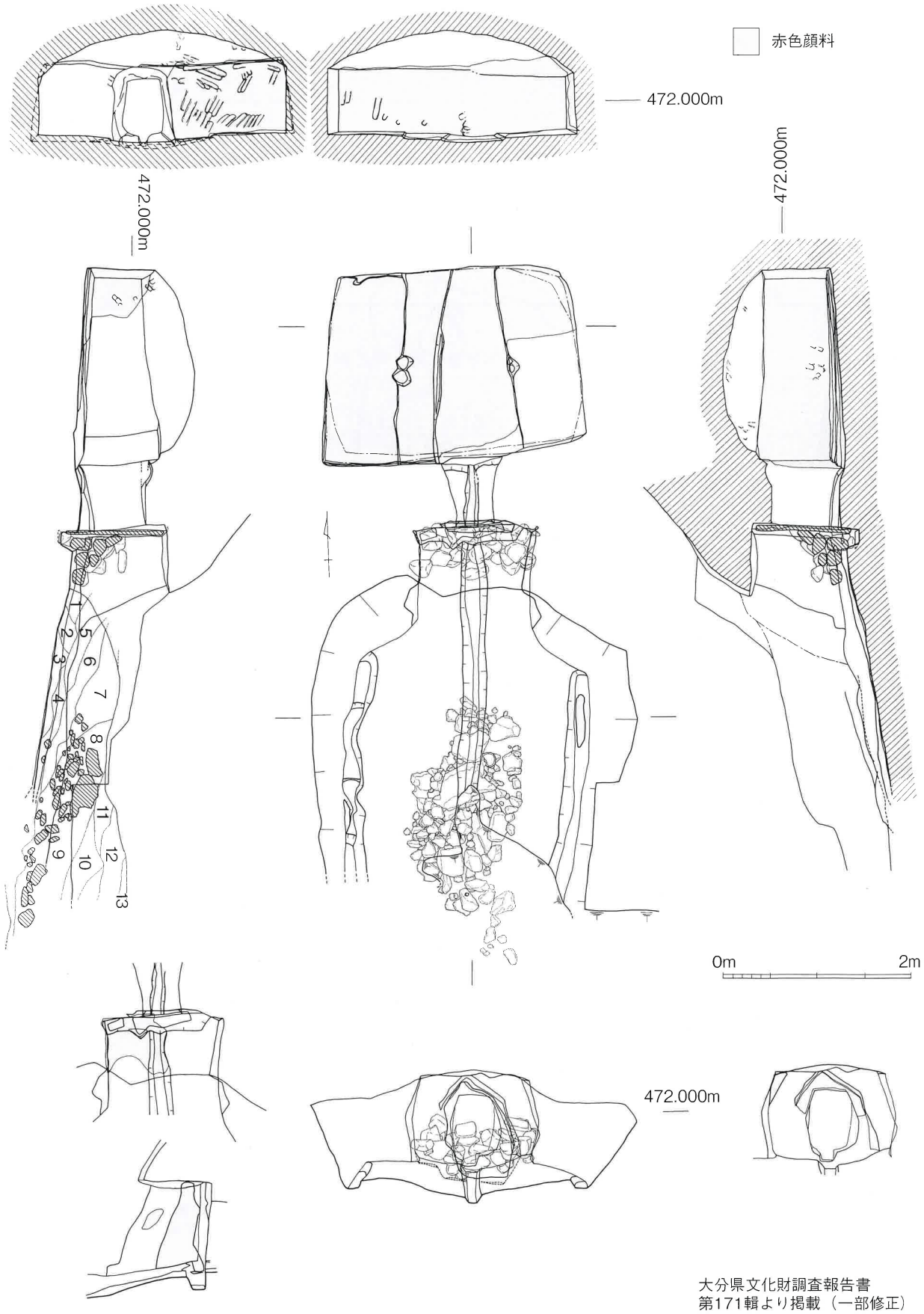
高橋・小林「九州須恵器研究の課題」古代文化第42巻第４号参照

註１）臼杵　勲　1984　「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
註２）註１に同じ
註３）藤永正明　1996　「太刀外装の変化」『金の太刀と銀の太刀』大阪府立ちかつ飛鳥博物館
註４）註３に同じ
註５）一瀬和夫　1996　「装飾付大刀を出土した古墳」『金の太刀と銀の太刀』大阪府立ちかつ飛鳥博物館
註６）関　義則　1986　「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　古墳文化研究会
註７）古野徳久　1989　「古墳時代鉄鏃の編年」『九州考古学』九州考古学会
註８）九州前方後円墳研究会編　2001　『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第2分冊　資料編
註９）池邊千太郎2001「豊後地域における横穴墓の様相」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第2分冊豊後編
註10）高倉洋彰　1999「儀鏡の誕生」『考古学ジャーナル』ニュー・サイエンス社6月増大号
註11）甲斐寿義他2004「長湯横穴墓・群桑畑遺跡」『大分県文化財調査報告書第171輯』大分県教育委員会
註12）註９に同じ
註13）新納　泉　1983「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第三十巻第三号
註14）大分県立歴史博物館の宮内克己氏のご教示による。
註15）渋谷忠章　1984「直入地方の夜明け」『直入町史』直入町



大分県文化財調査報告書
第171輯より掲載

第12図　長湯横穴墓群６号墓実測図（1/40）



大分県文化財調査報告書
第171輯より掲載（一部修正）

第13図　長湯横穴墓群7号墓実測図（1/60）

附篇
山脇横穴墓出土人骨について

石川健・田中良之*
（*九州大学大学院比較社会文化研究院）

１．はじめに

大分県直入郡直入町に位置する山脇横穴墓は、2004年に大分県教育委員会によって調査され、人骨が出土したため、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、田中・石川が現地に赴いて、発掘・観察・取り上げを行った。その後、人骨は九州大学に搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を記載・報告する。なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類学資料室に保管されている。

２．出土状態

２－１　1号人骨

玄室内東側屍床と西側屍床から人骨各１体が出土しており、東側を１号人骨、西側を２号人骨とした。１号人骨は頭位を南にした伸展葬である。頭蓋骨・下顎骨はやや西を向いた状態である。顎関節は外れた状態で上顎骨が本来の関節した状態からやや前面にせり出した位置にあり、軟部組織の腐朽によって、頭蓋骨が若干西に倒れたため、顎関節が外れたものと考えられる。

躯幹骨は、頸椎以下腰椎までほぼ関節した状態であるが、頸椎から第１腰椎までは若干西に傾いた状態である。左右肋骨・胸骨はほぼ解剖学的正位置を保つ。

上肢骨は、左右鎖骨及び右肩甲骨が胸椎の左右に位置し、鎖骨の胸骨端側が胸骨柄に近い位置で出土している。右上腕骨・橈骨はほぼ南北に長軸をとり手を回外させた状態である。橈骨遠位端は右寛骨の下位に位置する。左上腕骨・前腕骨は長軸を北西－南東にとり、本来の解剖学的な正位置からはやや西にずれた状態であり、軟部組織の腐朽により屍床から転落したものと考えられる。

下肢骨もほぼ関節状態を保持している。膝関節上には膝蓋骨がのった状態である。また、両膝が接した状態であることから、両膝を緊縛した状態で埋葬された可能性もある。左寛骨及び仙骨下位から足指骨が複数出土しており、左膝関節外側近くからも肋骨片・足指片が出土している。足骨はほぼ関節状態を保持するものの、左母指中節骨が近遠が反転した状態で出土している。ただ、これは意図的なものではなく、墓室の構造と関係がある。というのも、２号人骨の屍床が玄門との位置関係や方向からみて正常であり、壁面の仕上げも丁寧であるのに対して、１号人骨が埋置された玄室東側屍床は、玄室プラン全体から見ると北側にいびつに張り出していて、仕上げも雑である。このことから、１号人骨の埋葬に際し、横穴掘削当初片袖であった玄室を追葬の際に玄室東側を拡張して１号の埋葬スペースを確保したか、あるいは横穴掘削当初から両袖であった場合においても、当初のスペースでは収まりきらなかったために、埋葬空間を北側に拡張することにより１号人骨の埋葬スペースを確保したものと考えられる。しかし、いずれの場合においても、壁面ぎりぎりでの窮屈な状態で埋葬したことにより、足の指が若干そった状態となり、軟部組織の腐朽により母指の一部が反転したものと考えられるのである。

以上のように、１号人骨は、おおよそ解剖学的正位を保つものであり、埋葬時の状態をほぼ保持しているものと考えられる。ただ、一部の骨が不自然な位置で検出された。そのうち、左膝外側出土の肋骨片などは小片であることから、あるいは小動物などにより移動された可能性も考えられる。しかし、左寛骨・仙骨下位出土の足指骨については、１号人骨のものとすると、上記のように足根骨以下はほぼ関節状態を保つことから、本人骨に伴う足指骨とは考えがたい。一方、詳細は後述するが、２号人骨の足骨は若干乱れた状況を呈しており、２号の足

指骨を二次的に１号人骨寛骨付近に移動した可能性が考えられるのである。

副葬品としては、直刀が１号人骨の右側面、右上腕骨・前腕骨に接する位置に副葬されている。その東側、刀装具付近からは木材片が出土した。また、小形の青銅鏡が左肩甲骨に近接した位置から出土した。さらに左右大腿骨間及び左右脛骨間の近位側、足骨下位にベンガラが残存しており、それらに混じって赤茶色の木質と思われるブロックが認められた。これらのブロックが木質であるとすれば、遺体は板材の上に安置されたと考えられる。また、玄室の狭隘さと追葬であることからみて、遺体を板材に乗せて横穴内に挿入し、屍床上に安置した可能性が考えられる。

２－２　２号人骨

２号人骨は、玄室西側屍床に埋葬されており、頭位を南にした伸展葬である。頭蓋骨は若干西側に傾いた状態で、顎関節は外れている。下顎骨も、オトガイが北西方向を向き、やや西に傾いた状態である。

左上腕骨・肩甲骨は頭蓋骨の西側下位に位置し、前腕骨は上腕の北から北西方向に、近位端を北にした状態である。肩関節・肘関節は関節状態にはないが、本来の位置をほぼ保持するものと考えられる。右上肢は、鎖骨が下顎骨の東側から長軸をほぼ南北にし、胸骨端を北側にした状態で出土している。鎖骨の北側に肋骨片と胸骨柄が出土している。

肋骨は左肋骨が下顎骨オトガイに近接した位置から左前腕骨にかけて位置する。これら肋骨の南側部分は肋骨頭が左鎖骨下位や左肩甲骨上にややまとまって位置し、北側部分は胸椎付近から左前腕骨上位に位置する。これらの左肋骨は、いずれも肋骨頭や骨体部が相互に密接した状態にあることから、本来の解剖学的位置関係を保持するものではなく、まとめられた様な状況を呈する。右肋骨は、頭蓋骨西側から肋骨片１が出土している他は、ほとんど残存しない。椎骨は、頸椎片が左右下顎頭間から出土し、胸椎片が一部オトガイ北側から出土する。これらの延長線上ほぼ北西方向にそって第10胸椎以下第５腰椎までは、下肢に向かって軸が西に傾いた状態であるが、ほぼ関節した状態を保持する。断片的に遺存する胸椎と第10胸椎以下関節状態にある椎骨の延長線上に下顎骨が位置していることから、下顎の位置はほぼ原位置と考えられる。

下肢骨は、仙骨の左右に寛骨が位置し、左下肢は、長軸をほぼ南北にして位置する。膝蓋骨は大腿骨遠位端上にのった状態である。右下肢は、左と同様に長軸をほぼ南北にした状態であるが、大腿骨・脛骨とも背面を上に向け反転した状態である。右腓骨は左右脛骨間に位置しており、右膝蓋骨は大腿骨遠位端東側から後面を上にした状態であることから、右下肢骨が反転した際一緒に外旋したものと考えられる。足骨は、腫骨が左右とも脛骨遠位端付近に位置し、本来の位置に近いものの、指骨はやや乱れた状態である。また、距骨が右腓骨上にのった状態である。

以上の出土状況により、胸椎から腰椎・寛骨にかけては、関節状態にあるもののやや西に寄せられた状態であることから、軟部組織が腐朽する以前の段階で、追葬に伴い下肢を中心に西側によせ、その際に右下肢は関節が外れ外旋したものと考えられる。また、この追葬の際に、右肋骨は一部はねられ頭部の西側に動き、左肋骨もよせられたものと考えられる。さらに、距骨も意図的に右腓骨上に動かされた可能性が高く、距骨を抜去する際、足の骨が乱れたものと考えられる。このような距骨の抜去と同様に、2号人骨足骨の一部が意図的に抜去され、１号人骨腰下部に動かされた可能性が高い。

以上のような２体の出土状況から、１号については足部分の横穴壁面の拡張が認められる点、また２号人骨については追葬に伴うと考えられる片付けが認められることから、２号が初葬で、１号が追葬であると考えられる。両者の埋葬間隔については、１号人骨追葬時に２号人骨が、左下肢や椎骨がほぼ関節した状態のまま動かされており、一方肋骨は一部片づけられ、右の膝関節が外れ膝蓋骨も若干離れた位置にあることなどから、軟部組織の腐朽がある程度進んでいるものの、完全には腐朽しきっていない時点で行われているものと考えられる。通常軟部組織の腐朽は部位や環境により異なるが、横穴墓の場合、これまで近・現代における改葬の事例などから軟部組織の腐朽が完了ないしはそれに近いほど進行するには10年程度見込まれる（田中1995）。このような点を考慮

すると、初葬者埋葬後おそらく５～６年ほどは経過した段階で、１号人骨の追葬が行われた可能性が高いと考えられる。

３．人骨所見

３－１　1号人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨は左側頭骨、及び後頭骨の一部を欠く他はほぼ完存する。頭蓋主縫合は、外板が一部閉じており内板はほぼ閉鎖している。眉弓は発達せず、前頭結節がやや発達している。乳様突起は発達しており、外後頭隆起もやや発達している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

（○歯槽開放　×歯槽閉鎖　/欠損　△歯根のみ　・遊離歯　（ ）未萌出　c齲歯以下同様）

歯牙咬耗度は、栃原の2°　b～3°　である（栃原1957）。また、上顎左第１大臼歯は極度の咬耗により歯冠が全く残っておらず、歯根部に膿瘍とみられる骨吸収が認められる。

躯幹骨は、第２頸椎、第８～12胸椎、腰椎、仙骨が残存する。肋骨片も多数遺存する。腰椎には若干骨棘が認められる。

上肢骨は右鎖骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、右前腕骨が遺存している。肩甲骨は左右とも関節窩付近が遺存する。上腕骨は左右とも近位端が失われ、左上腕骨は遠位端内側顆を欠く。三角筋粗面は発達している。前腕は、右橈骨が近位端を欠損する他は遺存し、尺骨は近位端付近の骨体部が遺存する。手骨は、右第１・２中節骨、左第１中手骨が遺存する。その他にも部位不明の指骨片が認められる。

下肢は、左右寛骨が左坐骨部を欠する他はほぼ完存する。大腿骨・膝蓋骨・脛骨は左右とも完存し、腓骨は右骨頭が失われている他はほぼ完存する。大坐骨切痕角は小さい。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線はともに発達している。足骨は、足根骨が左右ともほぼ完存する。その他に、右は第１・５中足骨が遺存し、左は第１中足骨及び第１基節骨に加え左中足骨３、基節骨２が遺存する。また、本人骨左寛骨下位より出土した足骨については、中足骨遠位付近及び基節骨近位付近が遺存していた。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗がかなり進行しており、頭蓋主縫合の癒合も進んでいることから、熟年と推定される。性別は、大坐骨切痕角が小さく、乳様突起・外後頭隆起が発達し、また大腿骨粗面・脛骨ヒラメ筋線が発達していることから、男性と判定される。

【形質的特徴】

本人骨の計測値は、頭蓋最大長190.6㎜、頭蓋基底長103㎜、頭蓋最大幅137㎜、バジオン－ブレグマ高140.5㎜、頬骨弓幅134.8㎜（推定値）、中顔幅104㎜、顔高120.6㎜、上顔高69.3㎜、眼窩幅40.2㎜、眼窩高35㎜、鼻幅24.5㎜、鼻高53.5㎜である。これらの計測値から算出された各示数は次の通りである。頭長幅示数71.9で長頭、頭長高示数は73.7で中頭、頭幅高示数は102.6で狭頭である。コルマン顔示数は89.5（推定値）で中顔に属する。ウィルヒョウ顔示数は116.0で低顔に属する。コルマン上顔示数は51.4で中上顔に属する。ウィルヒョウ上顔示数は66.6で低上顔に属する。眼示数は87.1で高眼窩に属し、鼻示数は45.8で狭鼻である。

四肢骨は、上腕骨中央周が69㎜で、大腿骨最大長408㎜、中央周85.6㎜、脛骨は最大長323㎜（右）、栄養孔位周は97㎜である。

これらの値を近隣に位置する長湯横穴墓出土の人骨群の観察結果と比較すると、脳頭蓋は頭長高示数で中頭である他はさほど異ならない。顔示数などをみると、コルマン顔示数・上顔示数とも、本人骨は長湯横穴出土人骨に比べやや顔が高い傾向を示すが、ウィルヒョウ顔示数・上顔示数ではほぼ同様の値である。また、眼窩は長湯横穴出土人骨の平均値よりやや高眼窩の傾向で、鼻示数では狭鼻の傾向が強く見られる。

大腿骨最大長にPeasonの式を適応して推定身長を求めた結果、158.0cmであった。これは長湯人骨の平均身長158.2cmにほぼ等しい。

【特記事項】

顔面・前頭部から頭頂部にかけてと、右足骨に赤色顔料の付着が認められる。

3－2　2号人骨

【保存状態】

保存状態は良好である。頭蓋骨は、左乳様突起付近から左右頭蓋底付近を欠く他は、ほぼ完存する。眉弓・外後頭隆起ともに発達が弱く、前頭結節が発達する。頭蓋主縫合は全て内外板ともに開放する。下顎骨は左下顎頭を欠く他はほぼ完存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	○	M^1	P^2	○	C	I^2	I^1	○	I^2	C	P^1	P^2	×	×	/
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	△	M_1	M_2	M_3
c		c	c	c	·						c	c		c	c

その他に歯種不明の歯根片が遺存する。歯牙咬耗度は栃原の3°である（栃原1957）。

躯幹骨は胸椎1、腰椎5、および環椎片・胸椎片・左肋骨片7・左右不明肋骨片2が遺存する。仙骨は左半部が遺存する。腰椎には骨棘が認められ、特に第4・5腰椎に顕著である。

上肢骨は、左右鎖骨・左肩甲骨・左上腕骨・左橈骨が残存する。鎖骨は左右ともに遠位端を欠く。左肩甲骨は関節窩付近から外側縁が遺存する。上腕骨・橈骨は遠位端を欠く。

下肢骨は、左右寛骨および左右膝蓋骨・脛骨・腓骨がほぼ完存する。大腿骨は、右骨頭および左大転子付近を欠く他は、ほぼ遺存する。足骨は、足根骨が右腫骨外側、左内側楔状骨を欠く他はほぼ遺存する。その他に、右第1中足骨を含め中足骨3、左第1～第4中足骨、基節骨3、不明指骨1が遺存する。寛骨大坐骨切痕角は大きく、前耳状溝が認められた。恥骨結合面は、上半部を中心に不規則な凹凸がみられ、若干骨吸収が認められた。大腿骨粗線はやや発達するが、脛骨ヒラメ筋線の発達は弱い。

【年齢・性別】

年齢は、大臼歯の脱落と歯槽閉鎖がみられること、歯牙咬耗がかなり進行していることから、熟年後半以上と推定される。性別は、大坐骨切痕角が大きく、眉弓・外後頭隆起・ヒラメ筋線の発達が弱いことから、女性と判定される。

【形質的特徴】

本人骨の計測値は、頭蓋最大長177mm、頭蓋基底長97mm、頭蓋最大幅133mm、バジオン－ブレグマ高132mm、頬骨弓幅138.8mm（推定値）、中顔幅107.5mm、顔高102mm、上顔高60.3mm、眼窩幅42.8mm、眼窩高34.2mm、鼻幅27.4mm、鼻高43.4mmである。これらの計測値から算出された各示数は次の通りである。頭長幅示数75.1で中頭、頭長高示数は74.6で中頭、頭幅高示数は99.2で狭頭である。コルマン顔示数は73.5（推定値）で低顔に属する。ウィルヒョウ顔示数は100.4で過低顔に属する。コルマン上顔示数は43.4で低上顔に属する。ウィルヒョウ上顔示数は59.4で過低上顔に属する。眼示数は79.9で中眼窩に属し、鼻示数は63.1で過広鼻である。

四肢骨は、大腿骨最大長366㎜、中央周79㎜、脛骨は最大長288（右）㎜、栄養孔位周は76㎜である。

１号人骨同様に、これらの値を長湯横穴墓出土人骨の観察結果と比較すると、脳頭蓋は頭長幅示数が中頭で長湯人の平均的傾向と大差ない。顔示数などをみると、コルマン顔示数・ウィルヒョウ顔示数では長湯人骨に比べやや低顔な傾向を示し、コルマン上顔示数・ウィルヒョウ上顔示数とも長湯人骨とほぼ同様の低上顔であるが、長湯人骨に比べやや上顔が低い傾向を示す。眼窩も長湯人骨と同様の中眼窩である。鼻示数では、広鼻の傾向がより強く見られる。

大腿骨最大長にPeasonの式を適応して推定身長を求めた結果、150.1cmであった。

４－１．被葬者間の関係

山脇横穴墓からは人骨が２体出土したが、２号人骨は歯牙脱落が多く、また両人骨ともに歯牙の咬耗がかなり進んでいることから、歯冠計測値を用いた血縁者の推定は困難であった。以下では、出土人骨の年齢・性別・埋葬順序をもとに、被葬者の世代構成を復元し、想定される被葬者間の関係について検討してみたい。

まず、上述の通り２号人骨（熟年後半以上の女性）→１号人骨（熟年の男性）の順に埋葬されており、埋葬間隔は10年には満たない５～６年ほどと考えられる。このような被葬者の年齢と埋葬間隔を考慮すると、埋葬間隔を約５年とした場合、２号人骨の埋葬時、追葬された１号人骨は成年後半から熟年となり、２号人骨を最も若く50代頃とした場合でも、１号人骨が成年後半（30代）であったとすると両者に世代差があったこととなり、１号人骨が熟年であったとすると二世代までは年齢差がないものと考えることができる。このように被葬者間の関係において世代差がある場合と無い場合の二者が想定されることから、前者であれば親子、後者であれば年齢の離れた姉弟ということになり、いずれの場合においても、双系のキョウダイ関係に基づく基本モデルＩと矛盾しない関係と考えられる（田中1995）。

これまで古墳時代の親族関係及び埋葬原理については、３～5世紀代にはキョウダイ原理、５世紀後半以降に父系直系家族が埋葬され、６世紀前半から家長の妻が埋葬されるようになる、との変遷過程が示されてきた（田中1995）。またその一方で、５世紀後半～末の宗像市浦谷Ｃ－４号墳における男性２体の兄弟の埋葬例（田中1995）、６世紀中葉～後半の島根県玉湯町岩屋遺跡におけるキョウダイの埋葬例（田中2001）等から、古墳時代における親族関係及び埋葬原理の変化の実態の多様性についても指摘が行われている。ここで長湯横穴墓における被葬者間の検討結果と対比すると、長湯６号横穴墓では10代後半から成年前半の男性２体の埋葬が行われ、歯冠計測の結果両者間に血縁関係がに有ることから兄弟であった可能性を指摘し、また、２号横穴墓についてもキョウダイ原理による埋葬であった可能性を有している点を指摘した（石川他2004）。上記のように山脇横穴墓出土人骨については、２通りの被葬者間の関係を想定することができるが、母子・姉弟いずれの場合においても基本モデルＩの範疇で理解でき、また上記のような長湯横穴墓の分析結果とも整合性をもつものといえる。

４－２．山脇横穴墓出土人骨にみられた葬送儀礼

本横穴墓においても、遺体を用いた儀礼行為と考えられる所見がみられた。すなわち、初葬者である２号人骨の右距骨が、本来の脛骨遠位端に関節せず、右脛骨骨体上におかれた状態であった。このような移動は極めて不自然であり、人為を考えるべきである。また、指骨が若干乱れた状況であることから、距骨の抜去は軟部組織が腐朽した後である可能性が高い。また、１号人骨の寛骨下位から、２号人骨の足指骨と考えられる中足骨・基節骨が出土した。これらに関しても、距骨を抜き去る際に指骨の一部をも取り去り、１号人骨腰部下位においたものと考えられる。このような儀礼行為は、本横穴墓に近接する長湯横穴墓群においても様々な形で認められるが、上記のような距骨を抜き去り腓骨上に置くという行為は、長湯６号横穴墓１号人骨においてほぼ同様のものが認められる。また、１号人骨腰部下位にみられた初葬者の足骨の二次的移動についても、これまで知られている、膝蓋骨など脚部を中心にして行われる再生阻止儀礼（田中・村上1994；田中・石川2004）と同様の行為と考えられる。

5．おわりに

以上出土人骨についての記載報告を行ってきた。その概要は以下の通りである。

- 本古墳からは、１基の横穴墓から２体の人骨が出土した。
- これらの人骨は保存状態が比較的良好であり、２体とも計測が可能であった。その結果　は、本横穴に近接する長湯横穴墓出土人骨群の平均値と多くの計測値において同様の結　果を得ることができた。
- また、被葬者間の関係については、歯牙の咬耗度合いから、歯冠計測値を用いた血縁関　係の推定は困難であった。ただし、年齢や埋葬間隔から想定される被葬者間の関係は、 長湯横穴墓の分析結果を否定しないものであった。しかし、これらはいずれも情報が不　足しており、検証をへたものでないことはいうまでもない。
- また、当横穴墓からも脚部を中心に行われる再生阻止儀礼が認められた。

最後に、本報告にあたり、大分県教育委員会の甲斐寿義氏にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。感謝したい。また、人骨整理においては九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座の鈴木 克・邱 鴻霖の両氏に協力頂いた。記して謝意を表したい。

参考文献

石川健・舟橋京子・渡辺誠・原田智也・田中良之，2004：長湯横穴墓出土人骨について．長湯横穴墓群　桑畑遺跡．大分県教育委員会，大分．

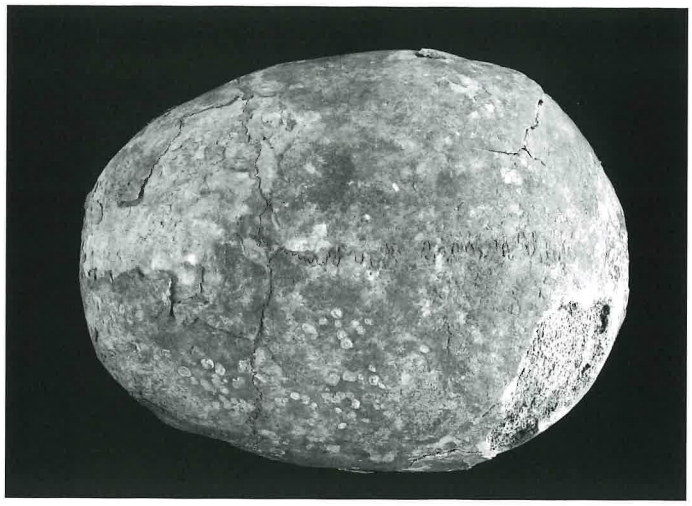
田中良之，1995：古墳時代親族構造の研究．柏書房，東京．

田中良之，2001：岩屋古墳群出土人骨の親族関係．岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡．中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書６．日本道路公団中国支社・島根県教育委員会，松江．

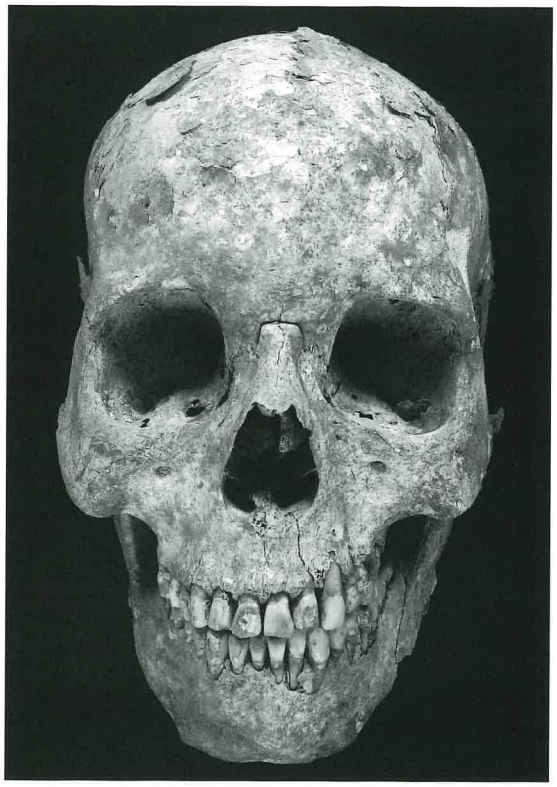
田中良之・村上久和，1994：墓室内飲食物供献と死の認定．九州文化史研究所紀要,39

田中良之・石川健，2004：多田山古墳群出土人骨．多田山古墳群第１分冊　本文編．群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

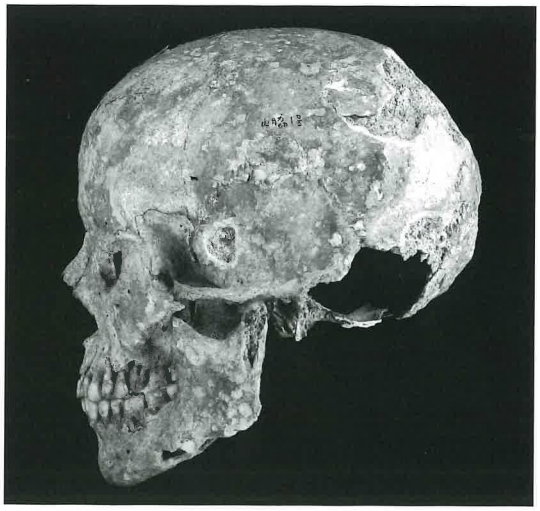
栃原　博，1957：日本人歯牙咬耗度に関する研究．熊本医学会雑誌，31-4.



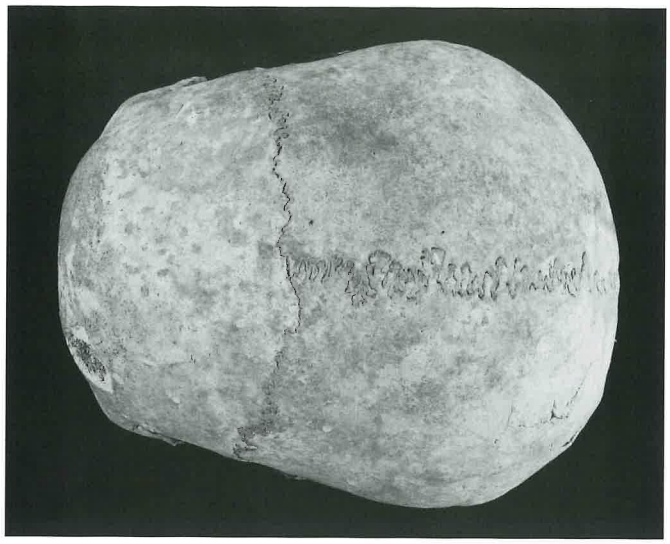
1号人骨　頭蓋骨
（上面観）



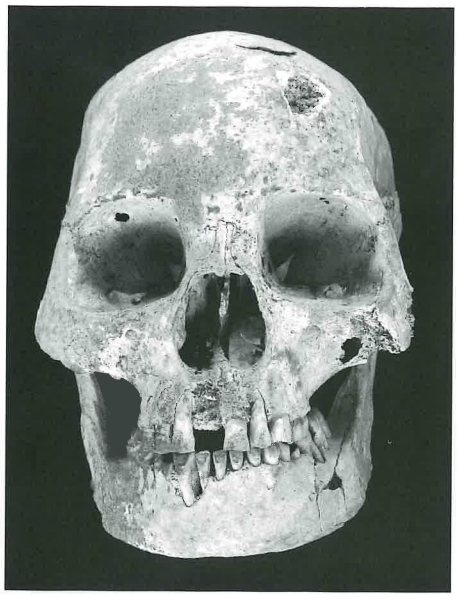
1号人骨　頭蓋骨
（正面観）



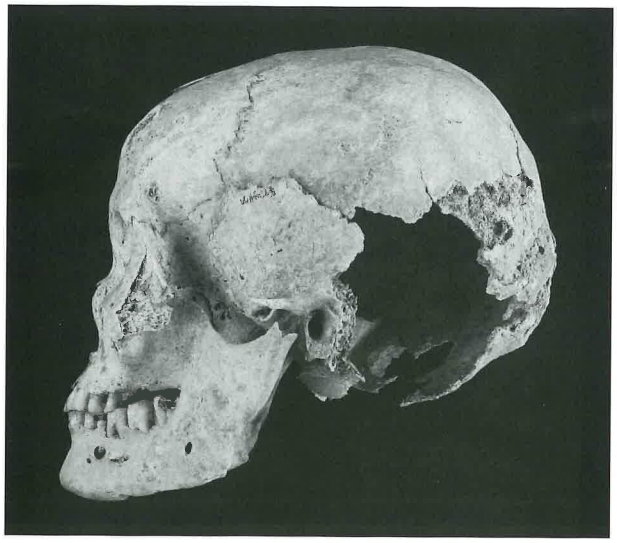
1号人骨　頭蓋骨
（側面観）



２号人骨　頭蓋骨
（上面観）

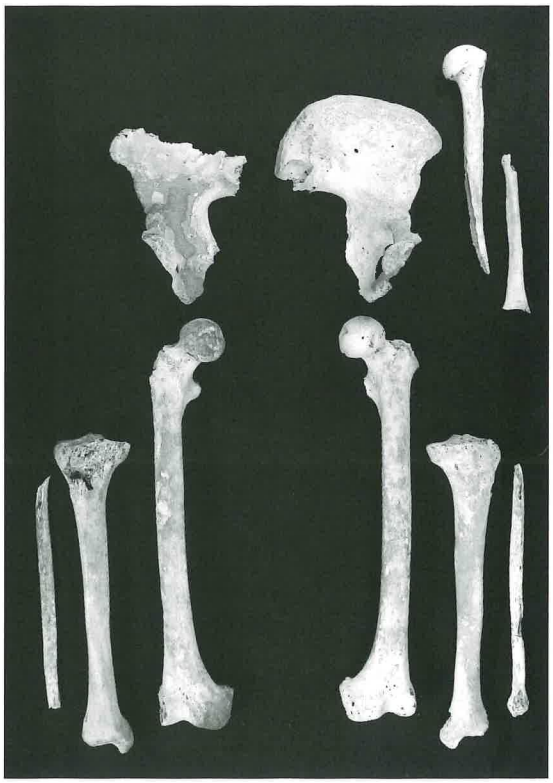


２号人骨　頭蓋骨
（正面観）



２号人骨　頭蓋骨
（側面観）

1号人骨　四股骨



2号人骨　四股骨

報告書抄録

フリガナ	ヤマワキヨコアナボ
書名	山脇横穴墓
副書名	主要地方道庄内久住線道路改良工事
巻次	第11集
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	
編著者	甲斐　寿義
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870－1113　大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
発行年月日	2006年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	ショザイチ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヤマワキヨコアナボ 山脇横穴墓	タケタシナオイリ 竹田市直入 マチオオアザナガユ 町大字長湯 アザヤマワキ 字山脇	550	071	33°04′04″	131°22′29″	20040514 ～ 20040531	100	主要地方道庄内久住線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山脇横穴墓	横穴墓	古墳	横穴墓　　１基	鹿角装鉄刀 素文鏡 刀子 鉄鏃 人骨２体	

要約	山脇横穴墓は竹田市直入町大字長湯に所在する。芹川左岸、標高470mの丘陵縁辺部に位置しており、平成13年度に調査を実施した長湯横穴墓群からは約500m西にあたる。工事中に天井部が開口しその存在が明らかとなり、緊急に本調査を実施することとなった。 調査の結果、古墳時代後期の横穴墓1基と時期不明の道状遺構を確認した。横穴墓の玄室内から２対の人骨とともに、鉄族・直刀・小型の素文鏡などの副葬品を検出したが、前庭部からは遺物は出土していない。 この横穴墓は、羨道が玄室に向かってかなり傾斜しており、羨道と玄室の間には段差が存在するなど初期横穴墓の特徴を有している。また、出土した遺物の特徴や、前庭部で墓前祭祀が認められないことなどか、この横穴墓は５世紀末～６世紀初頭頃の初期横穴墓の可能性が高い。

山脇横穴墓

－主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第11集

編集　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870－1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL（097）597－5675

発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870－1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL（097）597－5675

印刷　株式会社インタープリンツ
〒879－5405
由布市庄内町大字長宝312
TEL（097）582－1122